The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	前世紀転換期イギリスにおける帝国と地理 ： 「帝国意識」形成の歴史的背景
Author(s)	川本, 真浩
Citation	待兼山論叢. 史学篇. 1997, 31, p. 27-50
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48086
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

前世紀転換期イギリスにおける帝国と地理

――「帝国意識」形成の歴史的背景――

川本真浩

一　はじめに

前世紀転換期のイギリスにおいて、帝国に属する人々に共通の記憶をもたせるべく、帝国の歴史をたどる書物が刊行されたり、歴史教育が重視されたりしたことは、他の近代国家でもみられた「国民意識」や「ナショナリズム」の形成過程とも共通する出来事であった。だが、実体としての帝国は――とくに近代イギリスにとっては――まず地理的なひろがりをもつものであり、それゆえに帝国の現状にかんする知識や認識こそが、帝国にたいする意識のみならず自己認識や世界観の前提ともなってきたはずである。(1) そうだとすれば、帝国を対象とするアイデンティティの基盤も、その歴史意識のみならず、地理的な認識によっても固められたとみるべきであろう。この点にかんしては、地理学と帝国、帝国主義、さらにナショナル・アイデンティティなどとの関係を論じる研究が、近年相次いで刊行されてきている。(2) 実際、帰属意識としての帝国意識の形成過程において、地理学や地理教育が歴史学や歴

史教育に優るとも劣らない役割を果たしてきたとすれば、そのことはもっと注目されてしかるべきなのである。[3]

このことに関連して、同時期のイギリスにおいて国家レベルでの教育制度の整備が急速に進展したことは見落とせない。一八七〇年の初等教育法の制定以来、いわゆる労働者階級に属する人々も含めた「国民的」な規模での公教育が拡充されていった。これもまた、ある意味で当時のイギリスが擁した広大な帝国の存在とは不即不離の関係にあったのである。帝国と密接な関係にあった教育のありようについては、近年の帝国史研究のなかで学校のカリキュラムや教科書を対象として研究がかなり進められてきた。[4] もちろん、これらの研究のなかにも、帝国教育としての地理教育への言及が随所にみられる。

本稿の目的は、帰属意識としての帝国意識が形成される歴史的過程に注目する立場から、先行研究の成果に依拠しながら、さらに具体的な事例も加えつつ、前世紀転換期のイギリスにおける「歴史地理学」の登場からその初等教育への影響までを包括的にとらえ直してみようとするものである。[5]

とくに引用した具体的な事例は次の二つである。まず、第三章で扱う地理教育の状況については、主としてロンドンでの様子を概観する。参考としたＬＣＣ（London County Council）の「ロンドンの初等学校における地理科の教育方法にかかる会議の報告書」（以下、本文中では「ＬＣＣ報告」と記す。）は、初等学校における地理教育について議論・検討するためにＬＣＣが結成した、現役の学校教員や教育専門家、行政担当者からなる審議会が作成したものである。[6] また、第四章で扱う教材作成事業については、一九〇二年末に設立された植民地省視覚教材作成委員会 Colonial Office Visual Instruction Committee（以下、「ＣＯＶＩＣ」と記す。）の活動をとりあげる。[7]

したがって本稿の構成は、まず前世紀転換期のイギリスにおける「歴史地理学」の登場の様子をたどり、次に同

時期の（主としてロンドンにある）初等学校での地理教育について概観し、さらに両者をつなぐ位置に存在する教材を作成しようとしたＣＯＶＩＣの活動について論じる、というものになる。

二　帝国地理学としての「歴史地理学」の登場

そもそもイギリスにおける地理学の展開には、一八三〇年に創設された王立地理学協会 Royal Geographical Society（以下、「ＲＧＳ」と記す。）が大きな影響力をもった。[8] ＲＧＳは社会上層の地理的な関心を集約しており、地理的情報の収集、実際の探検活動の支援、そして地理教育の奨励が活動の主眼であった。[9]

一九世紀のイギリスでは、地理学が地質学や歴史学の下に従属するものとみなされる状況が長く続いていた。[10] ＲＧＳは一八八〇年代半ばになってもまだ、「地理学自体、その一部が歴史学に、商業に、あるいは地質学に属しているという、漠然として散漫な様相を呈している」として、地理学が独立した学問として確立されていないことに懸念を表明していたのである。[11] しかし世紀後半には、地質学の中で専門分化が進んで必ずしも野外調査や探検と直結しなくなったことと同時に、有力な地理学者のなかから独立した学問としての「新しい」地理学を希求する動きも高まってきていた。この「新しい」地理学への志向には、次のような特質や背景が認められる。

先にもふれたように、それまでの地理学は歴史学に対しても従属的なものとみなされる傾向にあった。[12] しかし、地理学を独立した学問として確立しようとする動きの中で、地理学は歴史学とは乖離する方向ではなく密接な関係を強める方向へ進んでいった。このことは地質学に対して距離をおく方向へ進んだこととは対照的であった。ＲＧＳにあって「新しい」地理学の展開を支えた当事者であったケルティ J.S. Keltie も、「歴史を完全に理解するため

には地理は不可欠であるという認識は多くのところで認められるものである。……おそらく、完璧な意味で、いかなる学知にもまして地理学は歴史学に光をあてるようにできているのである」、と述べていた。[13]「歴史地理学」の登場はまさにこうした地理学と歴史学の緊密な関係を反映したものだったのである。

次に、同時代の他のヨーロッパ諸国とは異なる特殊イギリス的な背景として、それ以前の時代からイギリスには自国の支配する広大な帝国が存在したということがある。イギリス帝国の地理を叙述したものについては、イングランドを「帝国」ととらえる概念とともに一六世紀はじめに登場し、ハクルートらが活躍した同世紀後半から一七世紀初めの時期にひとつの隆盛を見い出せる。[14]さらに、一六世紀末から一九世紀に至るまで、帝国内外の世界各地についての情報が、探検の記録や見聞記、旅行記、地図の類から移民を勧誘する雑誌記事まで、さまざまな形でもってイギリスに大量にもたらされた。[15]こうした歴史的背景は帝国情報の本国社会での広がりかたに影響しただけでなく、地理的な叙述に歴史的要素を取り込むことを容易にしたのである。

こうした地理学の動きに強い影響を及ぼしたのはシーリー J.R. Seeley の『英國發展史論 The Expansion of England』の刊行（一八八三年）であった。シーリーの思想は必ずしも正確に継受されたわけではないとの指摘もあるが、その著作がルーカスをはじめとする後世の「帝国研究」者たちに多大な影響を及ぼしたことは間違いない。[16]おりしも、いわゆる「帝国の時代」にさしかかり、国内外の状況は否応なしに帝国の状況と結び付けられるようになってきていた。[17]そうした状況下で地理学が学問の一分野として自己確立を果たすには、帝国にかんする知識を綜合することはたいへん有望な方途のひとつであった。

さらにそのさきに、集積した知識を社会に広める事業があった。つまり、教育と「新しい」地理学との密接な関

係も見落とすわけにはいかないのである。RGSの一部には、一八七〇年代からすでに、地理教育の新しい手法を案出するのに熱心な者もいたが、本格的にそうした動きが盛んになるのは一八八〇年代半ば以降である。そのころになるとRGSは、ロンドンをはじめ主要都市で教材や教育機器の展示会を開いたり、教師向けの講演会を主催したりしたのである。(18)

もっとも帝国の地理にかんしては、RGS以外の民間団体も教育関連事業をおこなっていた。なかでも、一八六八年設立の王立植民地協会 Royal Colonial Institute は、早くから資料・情報の収集から帝国にかんする議論の拠点としての機能を果たしていた。(19) また、一八九三年にRGSの内紛を契機に設立された地理学協会 Geographical Association は、機関誌『地理教師 Geographical Teacher』を刊行し、スライド基金を募って寄付を寄せてきた学校に地理教育用のスライドを供給するなど、地理教育の拡充をとくに意識した団体であった。(20) これらいずれの団体にもこの時期に現れた「歴史地理学」を形作った人物が深く関与していたのである。

このような背景のなかで、帝国主義的な思考や理念の啓発というイデオロギー的な色彩を帯びた帝国地理学たる「歴史地理学」があらわれてきたのである。そこで重要な役割を果たした人物としては、マッキンダー H.J. Mackinder、ルーカス C.P. Lucas、エジャートン H.E. Egerton、ジョージ H.B. George、ハーバートソン A.J. Herbertson などがあげられる。(21)

ただ、この「歴史地理学」は方法論が確立される以前の萌芽期のものであった。(22) 実際、この時期の「歴史地理学」書は内容も方法論も論者によってまちまちだったのである。バトリンは、ルーカスが編集した『イギリス植民地の歴史地理学』シリーズ（以下、『歴史地理学シリーズ』と記す。）と、ジョージの著作『イギリス帝国の歴史地理学』

（以下、『帝国の歴史地理学』と記す。）をとりあげることで、そうした状況をあきらかにしている。[23]

まず、『歴史地理学シリーズ』は、刊行に時間と労力を要したこと、改訂が繰り返されたことなどにより、内容・構成とも時期や執筆者による違いがかなりあった。[24] ただ、たいていの巻は地理と歴史のセクションが別個にわかれた構成となっていた。バトリンによると、ルーカスの叙述は、歴史の部では植民・入植の歴史や本国とのつながりについての国制上の基礎に叙述が集中しており、また地理の部では形式・内容とも基礎的なもので、新しい商業や交通の発展に力点をおいている、という。とくに、地質学的な説明は金鉱やダイヤモンド鉱にかんしてさえ全くなく、景観の性質やその変化を述べようともしていないとしている。[25] もっとも、同シリーズの中でもロジャーズの執筆した第五巻の「カナダの地理」には、バトリンは高い評価を与えている。[26]

一方、ジョージの『帝国の歴史地理学』については、それが事実より意味を重視していること、帝国の正当性をイギリスに敵対する国々の悪意を引き合いに出して述べていること、植民地の先住民に対する白人の優位をはっきりと言明していること、などの点でルーカスの「歴史地理学」とは対照的な特徴を有していると指摘している。

このように、当時の「歴史地理学」書は筆者がそれぞれの関心にそって帝国の歴史と地理について叙述したものであり、必ずしも一つのディシプリンにしたがって書かれていたわけではなかった。しかしその一方で、それぞれの「歴史地理学」書は、程度差はあれ、いずれも進歩史観、環境決定論、さらには自民族中心主義の要素を内包しながら、帝国の表象を提示していた。[27] こうした著作が海外帝国と本国との地理的・理念的な位置関係を構築し描写したことに着目してみれば、帰属意識としての帝国意識の形成過程を論じる観点からしても、「新しい」地理学のひとつとして現れた帝国地理学としての「歴史地理学」はけっして無視できない重要な存在だったと言えるのである。

三　初等学校における帝国教育としての地理教育

イギリスの公教育制度、とりわけ初等教育制度は一八七〇年教育法を皮切りに急速に整備されてきた。時期的な符合からも容易に推察されるように、帝国教育の要素は実際にそのいたるところに見い出すことができるのである。[28] とくに、一八九九年からのいわゆるボーア戦争を境に、初等教育は大きな変貌を遂げた。この戦争の後、若者の体格の悪さや体力のなさが問題となり、体を鍛えるため、もっと直接的に言えば「よい兵隊を育てる」ために、初等学校でも教練や体育が熱心に行われるようになった。こうした初等教育の変化にわずかに先んじる形で、内容的に帝国教育に直結する教科である地理科と歴史科が初等学校での必修科目とされたのも、一九〇〇年のことであった。しかし、このことがしばしば強調されるからといって、ボーア戦争以前には帝国教育への志向は弱かったというわけではけっしてない。とくに、歴史・地理の両科目にかんして言えば、初等教育制度が整備され始めたごく初期から、それも前者よりもむしろ後者に帝国教育における中心的な役割を担わせてきたと解釈できることに注目すべきである。

そうした解釈の前提として、両科目が教えられた度合を確かめる必要がある。政府のイングランドとウェールズにかんする統計によれば、一八八〇年代後半には公教育初等学校に属した男子科・女子科・共学科のなかで、地理が全体の五五パーセント前後の科で教えられていたのに対し、歴史は全体の二パーセント弱の科で教えられていたにすぎなかったのである。[29] その後一八九〇年代になると歴史を教える科はかなり増えたが、それでも必修化直前の一八九八―九九年度で総科数二三、一九一科のうち、地理を教えていたのが約七七パーセント（一七、八七二科）

であったのに対し、歴史を教えていたのは約二五パーセント（五、八七九科）であった。[30]

もちろん、地理科での帝国にかんする事項の扱いは、「教育令」など政府の教育内容にかんする規定にも明記されていた。「教育令」と同時に出ていた「視学官向け指針 Instructions to Inspectors」では、すでに一八七八年に「イギリス国王の諸領」への関心を喚起する旨の指示が出されていたが、「教育令」そのものでは一八八二年にはじめて第六学年の地理科にイギリスの植民地などについての情報を加えることが定められた。[31] また、一八八五年の「視学官向け指針」においても、高学年を対象として「イギリスの植民地およびその生産物、政府、資源、また、移民や事業に適した場所であれば気候やその他の諸状況にも注意を払うべきである」と記されている。

各学年の指導内容の例も示してみよう。以下に示したのはＬＣＣ報告に引用された一八八五年に政府が示したという「地理教育のためのプログラム」である。[32]

第一学年……学校や運動場の見取り図を説明。基本方位（北南東西）。地図の意味と使用。
第二学年……世界の大きさと形。イングランドの地図に触れることで簡単に説明し示せる地理用語。丘陵や河川。
第三学年……イングランドの自然地理と政治地理。学校のある地域の特別な知識。
第四学年……イギリス諸島、英領北アメリカ、オーストラレイシアの自然地理と政治地理、その生産物。
第五学年……ヨーロッパの自然地理と政治地理。緯度経度。昼と夜。四季。
第六学年……世界全般、とくにイギリス領植民地・保護領。生産物の交易。気候を決定する諸条件。
第七学年……大洋。潮流と海流。天体系の概要。月の満ち欠け。

このプログラムからわかるように、イングランド以外のイギリス諸島とならんで、ヨーロッパより先にカナダやオーストラリアなどの自治領植民地が取り上げられ、また世界全般を扱う第六学年においてもイギリスの植民地に力点が置かれている。その後、いくつかの点で改訂される部分はあるものの、こうした傾向は変わることがなかった。

このように「教育令」の規定などからみた地理教育はたしかに帝国関連の事項にかなりの比重をおいていたが、実際の地理の授業はどのようにおこなわれていたのだろうか。たとえば、ロンドンのなかでも貧しいスラムの多く分布するイーストエンドで育ったある人物の自伝では、「アメリカ独立戦争が、いやじっさいのところアメリカ合衆国の存在が、もみ消されていた。…地理の授業はイギリス帝国のことに限られていた…」、とまで記されているという。[33] これはやや極端な証言かもしれないが、やはり実際の授業でも帝国重視であったことにはまず間違いあるまい。

使用される教材といえば、一般にはまず教科書 textbook が想起される。たしかにこの時期の地理の教科書には帝国にかんする事項がふんだんに取り入れられていた。[34] だが実際には、労働者階級の子供が多かった初等教育の段階では高価な教科書が用いられることは少なく、むしろそれよりも安価な読本 reader が広まっていた。しかも、帝国にかんするトピックは地理に限らず歴史や公民 citizenship といった教科の読本で、さまざまな形でとりあげられていたのである。[35]

また、「…定期的に博物館見学をする学校もあれば、インペリアル・インスティチュートに生徒を連れて行くかわりに校内で生産物類を展示している学校…」もあった。[36] インペリアル・インスティチュートは、一八九三年に文字

どおり鳴り物入りでロンドン・サウスケンジントンに開館した帝国の事物を専門に扱う博物館である。[37] もっとも、この報告書が出たころのインペリアル・インスティチュートは、設立当初の構想とはかけはなれたかなりみすぼらしい状態であった。インペリアル・インスティチュートを見学せずに校内展示ですませるというのも、あるいはそうした状態を反映したものであったかもしれない。だが、むしろここでは、帝国産品の見本ないし現物が初等学校にまで持ち込まれていたということに注目したい。

そのほかにもさまざまな教材が用いられた。スライド、絵葉書、地球儀といった典型的な教材はもちろん、広大な帝国を擁した国ならではの教材も授業に取り入れられた。「…なかには、図版入りの新聞類、鉄道や船会社のポスター、移民や入植を斡旋するエージェンシー（の資料）、その他の資料からとった大判の写真を使う教師…」もいたのである。[38] ロンドンはもちろんイギリス全土でこの種の資料が比較的容易に入手できたことは、当時の移民情報のありかたから見ても明らかである。[39]

このように、一九世紀の終わりごろに整備・拡充されつつあった初等教育において、地理教育は選択科目であった段階から広く採用され、さまざまな教材を用いて子供たちに帝国の姿、帝国理念の素地となるものを提供していたのである。もっとも、こうした多様な教材を用いた地理の授業が生徒にどのように受け止められていたかを正確にたどることはたいへんむずかしい。ただ、もっぱら学校の外にある子供や教育のありように関心が集まっていた近年の研究にたいして、若干の見直しを促す向きもある。[40] それによれば、整備がすすめられたこの時期の初等学校は必ずしも「憎しみの場 a place of hatred」というものばかりではなく、これまでの研究から受ける印象以上に楽しく学校へ行っていた子供は多かった、という。そうした視点を採るなら、初等学校での地理授業の受け止められ

方もあながち否定的なものだとはいえまい。

実証できない以上、受け手の問題については今後再検討していく余地があることを示唆するに留めたい。いずれにせよ、ここで強調しておきたいことは、初等教育の地理教育の場において帝国の表象がふんだんに提示されていたということである。

四　帝国規模での地理教材作成の試み
――COVICの活動を中心に――

COVICは一九〇二年末に教育省のサドラーによる植民地担当大臣チェンバレンあての提言をもとに設立された植民地省内の組織である。ただ、財政面では一時期の一部人件費を除いて国庫からの支出は受けなかった。[41]それでも、政府機関で教材作成のための事業を――それも本国に留まらず帝国規模の事業として――おこなうのは前例のないことであった。また、植民地省下の組織ゆえに、植民地行政府との交渉や通信に公式のルートを使えるだけでなく、資料や情報の収集にも政府間ネットワークと民間ネットワークの両方が利用可能であった。このことは当時、文字通り世界規模で張り巡らされていたイギリスの情報ネットワークを駆使できるということにほかならなかった。[42]

委員は当初七名であったが、のちに一二名まで増えた。もちろん、設立を提言したサドラーもメンバーであったが、実際にこの組織のコンセプトを形作り、事業を主導したのはルーカスであった。また、実際の原稿作成やスラ

イド図版の選定作業にはマッキンダーが招請された。そのほか、委員には植民地の事情に詳しい人や教育関係者が任命された。「帝国記念日」制定運動をはじめとするさまざまな活動で有名なミーズ伯ブラバゾン R.Brabazon が委員長に任じられたし、そのほかにも帝国関連の啓蒙活動をおこなっていた民間団体とつながる人物が参加していた。たとえば、スミス C.C. Smith はRCIやインペリアル・インスティチュートに関与していて王領植民地での豊富な経験もあるという人物、のちにくわわったハッチンス P.Hutchins はインド省と帝国連盟 League of Empire に関係する人物、同じくイム・サーン E. im Thurn は熱帯植民地に詳しい人物であった。(43)

COVICの設立目的は、サドラーの提言に述べられたとおり、「帝国の一体性と帝国市民たる意識を高めるための教育的な手段」として、帝国の状況を伝えるスライドと講義原稿のセット教材を作る組織を設立しよう、というものであった。(44) そこでは「連合王国内の多くの人々が植民地の社会状況と経済的な機会について理解を深めることと同時に、植民地でも本国での生活の興味深い、選りすぐりの図版を見せる」ことが意図されていたのである。とくに学校に頒布することで子どもたちに強い印象を与えようと意図したことは特筆に値しよう。

ただ、ひとつ注意しておかなければならないのは、COVICは英語以外で教材を作成することは考えていなかった、ということである。(45) つまり、サドラーの提言で明言してはいないものの、COVICの教材はあくまで英語による教育を受けている子どもたちを対象としており、海外帝国にかんしては事実上、白人ないし社会上層の子弟に関心が限定されていたのである。こうしたことから、実際には有力な自治領植民地がこの事業に非協力的であったことを考え合わせれば、本国で意図された帝国意識が本国への帰属意識としての特性を強く帯びることになったことを、帝国プロパガンダのありようからも説明できることになるのである。

ＣＯＶＩＣの活動は以下のような三つの具体的な段階に整理することができる。まず、ＣＯＶＩＣがてがけたのは、植民地の子供たちに本国の様子を伝えるためのスライドと講義原稿のセットを作成することであった。試行事業として、セイロン、海峡植民地、香港の三植民地がそれぞれ三〇〇ポンドを拠出し、それを財源にイギリス本国内の事物や景観を見せるスライドとそれを解説する講義原稿を作成することになったのである。一九〇五年三月には三六〇枚のスライドと組みになった七講演の原稿が完成した。この三植民地向けの教材セット「東方植民地版」は、講義原稿五〇部、スライドセット二組、アセチレン幻燈機二台をひとまとめにして、それぞれの植民地に送られた。

第二段階としてＣＯＶＩＣは、完成した教材をもとにそれ以外の植民地の行政当局あてに同事業への協力を求めることにした。本国との位置関係や現地の状況の多様性にも対応する必要から、ほぼ帝国全体をカヴァーするように八種類の版を想定し、それぞれに該当する植民地が共同で出資することで各版を作成する、という計画であった。だが植民地省文書上で完成を確認できるのは、初めの東方植民地版のほかには、モーリシャス版、西アフリカ版、西インド諸島版、インド版だけであった。(46)

さらに第三段階としてＣＯＶＩＣは、帝国各地を紹介する教材の作成にとりかかった。一九〇七年にはその財源確保のために、皇太子妃をパトロンに据えた基金を設立し、三七〇〇ポンド余りの資金を調達した。一九〇七年九月からは、三年間の契約で、マッキンダーとフィッシャー A.H. Fisher にそれぞれ講演原稿の作成と写真・図版製作を任せた。船会社から渡航費免除の特典を得たフィッシャーは、一九〇七年一〇月から帝国各地を旅行した。(47)だが、インド編が完成しただけでマッキンダーが辞任し、後任者に引き継がれた仕事も完成をみないまま、ＣＯＶＩ

Cは第一次大戦で休止状態に追い込まれたのである。

こうしてCOVICが作成した教材の普及・利用状況については、現存史料からいくらかうかがい知ることができる。一九一一年九月の植民地省文書によると、それまでの教材セットの販売数は六六しかない。[48] これ以外にバラ売りもあったにせよ、このあとの事業の停滞ぶりもあわせて考えれば、第一次大戦までの販売数はおそらく一〇〇セットにも満たなかったものと思われる。ただし、販売先がほとんどは該当する植民地行政当局であり、そこから各植民地内で教育現場へどれだけ頒布（貸出）されたかは、必ずしも明らかではないゆえ、販売数だけから教材としての実際の利用程度を推測することは容易でない。事実、最初に製作された二セットを割り当てられた香港からは、各学校で使用されて好評であることを伝える書簡が送られてきている。[49]

では、COVICの教材が描き、伝えようとしたイギリス本国・帝国像を具体的に示してみよう。実際に作成されたのは本国を紹介する教材と後期のインド紹介編であるが、ここでは本国の表象をとりあげてみたい。第一、第二段階で作成された本国の様子を植民地に知らせるための教材には、マッキンダーの構成した本国「イギリス」の姿が表れている。本国を主題とした教材とて、帝国植民地の住人に「イギリス本国とはいかなるものであるのか」ということを知らしめようとした意図に基づいて、帝国と本国との位置関係の解説から始めている点で、間接的には帝国観を表すものであったと言えよう。[50]

最初に作られた「東方植民地版」は、一、東方植民地からロンドンへの旅（五〇）、二、帝国都市ロンドン（五九）、三、連合王国の情景（五二）、四、国内にある歴史を伝える事物とその影響（四四）、五、田舎の暮らしと小都市（六一）、六、大都市、工業、商業（四七）、七、帝国の防衛（四九）、という七講からなっていた。[51]

まず第一講は、それらの植民地からいわゆる「インド・ルート」をイギリスへ向かって場面が展開するという、三植民地の地理的な位置を意識させる構成となっている。[52] 各地の地図も提示しつつ、港やその町並み、あるいは航路上の船舶、海峡や運河などの重要地点が続く中で、とくに目を引くのがエジプトのアスワンダムとゴードン将軍が含まれていることである。いわゆる「公式」帝国ではないこの地域でのイギリスのプレゼンスを強調するには、格好の題材である。

帝国の首都たるロンドンをとりあげた第二講では、地図、景観、建造物や王族の肖像など、さまざまな角度から帝国の中心に位置するロンドン像を描出している。[53] また、第三―六講ではより広範に本国を紹介しているが、あとにも述べるように全体の傾向としてイングランド主体の構成が印象的である。とくに第四講でオクスフォードとケンブリッジの図版が四四枚中一五枚も含まれていることは、マッキンダーがオクスフォードで教鞭をとっていたとはいえ、目につく特徴である。最後の第七講は、南アフリカでの戦場の様子など実録的な図版もあるが、ほとんどは部隊や兵器、施設の図版であった。[54]

こうした教材からうかがえるのは、まずは帝国の中心に位置する本国の姿である。それは、空間的には第一講で示されたようなかたちであり、理念的には第二講の帝国首都ロンドンの姿と第七講での帝国防衛にあたる軍事力の強調というかたちであった。さらに、本国そのものの姿は、歴史を伝える事物を紹介する第四講と現在の状況を中心に詳細に解説する第三、五、六講とで提示されることになる。

それから、特定の建造物の外観や人工物（建造物のほか、機械など）を中心に据えた景観の図版とおもに自然景観をモチーフにした図版がそれぞれ約三分の一以上を占め、ついで行事や人間の動作を対象とした図版が多い、と

いうことがわかる。[55] 人の動きを図版に積極的に取り入れたのは、マッキンダーがとくに意識した方針であった。[56]

また、図版の構成がイングランド主体であったことも明らかな特徴である。第三講こそ、五二枚のスライドのうち、イングランドが二九枚、スコットランドが二一枚、ウェールズは二枚であるが、第四講は数枚の図版を除きほとんどがイングランド各地の歴史的な建造物や旧跡である。[57] 第五、六講の図版についても場所の同定はできないものの、やはりイングランドに偏っていた可能性は高い。[58] このことはオクスブリッジの図版が多かったこととはやや異なる解釈が必要であろう。なぜなら、当時の初等学校で用いられた読本で紹介される本国も圧倒的にイングランド偏重であったからである。[59]

さらに、第五講と第六講からうかがえるように、田舎や農業と大都市や商工業の扱いをくらべると、やや前者のほうに力点が置かれている。おおむね前者について詳しく解説されたであろうことは、図版の内容はもとより、スライドの枚数――前者が六一枚で後者が四七枚――からも想像に難くない。全体にイングランド偏重であったと目されることと、こうした「田舎」の姿に関心を寄せる本国の表象のありかたは、ちょうど同時期あたりから「イングランド的なるもの」がしばしば「田園」や「田舎」に結び付けられてきたとする見方にも合致するのである。[60]

COVICが作成した教材に表れた本国像、帝国像は、以上のようにまとめられる。だが、意識の面で帝国の一体化を実現しようとして企図されたCOVICの事業は、さまざまな原因によりその構想を実現することなく頓挫してしまったのである。COVICの失敗は、映画が普及しつつあった中で時代遅れのスライド教材を作ろうとしたことや、カナダやオーストラリアなど有力な自治領植民地の行政当局が協力に消極的であったこと、さらにはたびたび作業の遅れを責められていたマッキンダーが中途で辞任してしまったことなど、いくつかの事情が重なり

あった結果であった。だが最後に、帝国の表象にかんしてしばしば指摘される「自己」対「他者」の図式がＣＯＶＩＣの事業にはきわめて顕著にみてとれることを強調しておきたい。

そもそも、ＣＯＶＩＣの事業そのものが本国の支配層のみで企図・遂行されていた。ＣＯＶＩＣの委員に植民地代表はいなかったし、植民地当局に協力を求めるというのもあくまで既決事項の受け入れを求めただけであった。たとえば、ＣＯＶＩＣの協力要請に対してニューサウスウェールズ州が共同で教材を作成することを申し入れてきたときも、ＣＯＶＩＣは全くとりあわなかったのである。[61] さらに言えば、先に引用したように、ＣＯＶＩＣの教材作成事業に込められた意図は、「本国の人に植民地の状況を」「植民地の人に本国の状況を」それぞれ広く知らしめる、というものであり、その発想からしてすでに本国と植民地の対置関係が明らかであった。

このように、「本国」対「海外帝国」、「われわれ」対「かれら」という図式は二重の意味でＣＯＶＩＣによって体現されていた。この図式が「帝国の一体化」を達成するのではなく「本国の一体化」を推し進める要因として機能したことは、今後の議論では重要な論点となっていくのである。[62]

五　おわりに

前世紀転換期のイギリスに登場した「歴史地理学」は、イギリス帝国全体のなかでの本国と海外植民地との関係を、地理的空間と歴史的時間の交錯するところに措定した。「歴史地理学」も含めた地理学の成果によって描かれた帝国像すなわち帝国の構図は、各レベルでの地理教育を通じて広められたのである。それは紛れもなく、帝国意識を形成・定着させようとする志向になじみやすいものであった。

もとより、当時の「歴史地理学」が帝国主義の時流に与していたことを指摘すること自体に、さしたる意義があるとは思わない。それよりむしろ、「歴史地理学」や地理教育がその形成にかかわったと目される帰属意識としての帝国意識というものが、近年イギリスの学界で議論が高まりをみせているイギリスのナショナル・アイデンティティ British national identity（以下、「ブリティッシュ・アイデンティティ」と記す。）とどういう位置関係にあると解釈すべきなのか、ということに筆者の関心は向いているのである。[63] 帝国が地理的に崩壊したあとも帝国意識が残存することになったからといって、帝国の地理的な存在がそうした意識に作用したことを軽視するわけにはいかない。「歴史地理学」は、それにかかわった人々の意図にもかかわらず、帝国ではなく本国イギリスを単位とした意識の上での一体化を促すための知的基盤を提供することになった。[64] まさしく、「マッキンダーはブリティッシュ・アイデンティティを地理的に表現した」のである。

イギリスの「歴史地理学」が描いた帝国の構図は、このあと帝国自体が本格的な崩壊過程にはいってからも、しばらくは一定の有効性を保ち続ける。たとえば、戦間期のイギリスで盛んにおこなわれた帝国宣伝活動――民間団体によるものはもちろん、博覧会の開催や帝国マーケティング委員会の宣伝活動など――は、いずれも教育、あるいは地理的な知識とは不可分の関係にあった。[65] これらにみられる帝国の表象と帰属意識としての帝国意識の形成過程との関係についての考察は今後の課題としたい。

注

（1） サイードの著名な研究は、地理的な知識と意識上の帝国との関係をとらえた点においても重要なものである。ま

た同様に、マーシャルとウィリアムズによる研究も、イギリス近代のそうした関係にかんする優れた研究である。E・W・サイード、今沢紀子訳『オリエンタリズム』平凡社、一九八六年。P・J・マーシャル・G・ウィリアムズ、大久保桂子訳『野蛮の博物誌　一八世紀イギリスがみた世界』平凡社、一九八九年。

(2) たとえば'Godlewska, A. and Smith, N. (eds.), *Geography and Empire: critical studies in the history of geography*, Oxford, 1993; Hooson, D. (ed.), *Geography and National Identity*, Oxford, 1994; Bell, M., Butlin, R. and Heffernan, M. (eds), *Geography and Imperialism 1820-1940*, Manchester, 1995 など。また未刊行ながら、Ryan, J.R., 'Photography, Geography and Empire, 1840-1914', unpublished Ph.D. thesis for London University, 1994 も同一線上にある。

(3) 「帝国意識」については、木畑洋一『支配の代償　英帝国の崩壊と「帝国意識」』東京大学出版会、一九八七年、とくにその定義について、二七五―二七六頁。本稿ではそのうち「本国の人々が抱く帝国の中心国たる本国への帰属意識」という局面に注目する。

(4) MacKenzie, J.M., *Propaganda and Empire: the Manipulation of British Public Opinion, 1880-1960*, Manchester, 1984, chap. 7; Mangan, J.A. (ed.), *The Imperial Curriculum: Racial images and education in the British colonial experiences*, London, 1993; id., *'Benefit bestowed'?: Education and British Imperialism*, Manchester, 1988; Heathorn, S., '"Let us remember that we, too, are English": Constructions of Citizenship and National Identity in English Elementary School Reading Books, 1880-1914', *Victorian Studies*, 38(3) (1995).

(5) ここでいう「歴史地理学」は、次章で詳述するように、現在の歴史地理学とはかなり異なる。よってその違いを示すために本稿では前者を括弧付きで表記する。

(6) London County Council (Education Committee), *Report of a Conference on the Teaching of Geography in London Elementary Schools*, 1923 (originally published in 1912) (以下、註では 'LCC, *Teaching of Geography*' と記す。).

(7) ＣＯＶＩＣを扱った研究としては、以下のものがある。MacKenzie, *op.cit.*, pp.162-166; Ryan, 'Photography, Geography and Empire', chap. 7; id., 'Visualizing Imperial Geography: Halford Mackinder and the Colonial Office Visual Instruction Committee, 1902-11', *Ecumene*, 1(2) (1994). さらに植民地省文書も適宜参照した。

(8) 設立の経緯については、Stoddart, D.R., *On Geography and its History*, Oxford, 1986, pp.18-20. ちなみに同種の団体がパリには一八二一年、ベルリンには一八二八年に設立されていた。

(9) Stoddart, *op.cit.*, pp.60-62.

(10) とくに地質学との関係については、*ibid.*, pp.65-74.

(11) Butlin, R.A., 'Historical geographies of the British Empire, c.1887-1925', in Bell, et al, (eds), *op.cit.*, p.153.

(12) Ibid., p.153.

(13) Ibid., pp.152-153

(14) こうした帝国と地誌 geography との関係の始まりについては、Cormack, L.B., 'The Fashioning of an Empire: Geography and the State in Elizabethan England' in Godlewska and Smith (eds.), *op.cit.* 参照。

(15) マーシャル他、『野蛮の博物誌』、第二章：川北稔『民衆の大英帝国』岩波書店、一九九〇年、第五章：拙稿「帝国プロパガンダとしての海外情報の提供――世紀転換期イギリスの移民情報局――」『西洋史学』、一八二、一九九六年。

(16) Greenlee, J.G., "A Succession of Seeleys': the 'Old School' Re-examined', *Journal of Imperial and Commonwealth History*, 4(3) (1976).

(17) E・J・ホブズボーム、野口健彦・野口照子訳『帝国の時代』みすず書房、一九九二年。

(18) Ryan, 'Photography,Geography and Empire', p.244.

(19) とくに前世紀転換期のＲＣＩについては、Greenlee, 'Imperial Studies and the Unity of the Empire', *Jour-*

nal of Imperial and Commonwealth History, 7 (1979).

(20) Stoddart, *op.cit.*, p.24; Ryan, 'Photography, Geography and Empire', pp.245-246.

(21) 「歴史地理学」へのかれらの貢献については、Symonds, R., *Oxford and Empire*, London, 1986, pp.140-147; Butlin, op.cit.

(22) ハーツホーン R. Hartshorne が地理学の中での歴史地理学の位置付けを論じたのは両次大戦間期であった。藤岡謙二郎・矢守一彦・足利健亮『歴史の空間構造』大明堂、一九七六年、一頁。

(23) 前者は一八八七年から四〇年近くかけて刊行され、また後者も一九〇四年の刊行以来一九二〇年代まで改訂されつつ再版された著作であった。Lucas, C.P., *Introduction to a Historical Geography of the British Colonies*, Oxford, 1887; id. (ed.), *Historical Geography of British Colonies*, 7 vols., Oxford, 1888-1925; George, H. B., *A Historical Geography of the British Empire*, London, 1904.

(24) おもな執筆者として、エジャートン、ロジャーズ J.D. Rogers、ロバーツ P.E. Roberts、スタッブス R.E. Stubbs などがいる (Butlin, op.cit., p.159)。

(25) Ibid., pp.160-161.

(26) Ibid., pp.162-163.

(27) Ibid., pp.174-181.

(28) この時期の教育制度の整備については、B・サイモン、成田克矢訳『イギリス教育史II　一八七〇年―一九二〇年』亜紀書房、一九八〇年。また帝国教育については、Mangan, *'Benefit bestowed'?'* など。

(29) Board of Education, *Report of the Board of Education, 1899-1900: vol.3* (*Appendix to Report*), p.116 (Table 53). この主な理由は一八九〇年まで初等教育での歴史の授業を高学年に限定していたためと考えられる。

(30) *Ibid.*, p.116.

(31) Mangan, *'Benefit bestowed'?'*, p.40.

(32) LCC, *Teaching of Geography*, pp.10-11.

(33) MacKenzie, *op.cit.*, pp.187-188.
(34) *Ibid.*, chap.7.
(35) Heathorn, op.cit., passim.
(36) LCC, *Teaching of Geography*, p.33.
(37) MacKenzie, *op.cit.*, chap.5.
(38) LCC, *Teaching of Geography*, p.29-30.
(39) 当時の帝国にかんする移民情報の頒布状況については、川本、前掲論文参照。
(40) 前者の代表例として、S・ハンフリーズ、山田潤他訳『大英帝国の子どもたち―聞き取りによる非行と抵抗の社会史』柘植書房、一九九〇年。後者はJ・ローズの論稿である。Rose, J., 'Willingly to School: The Working-Class Response to Elementary Education in Britain, 1875-1918', *Journal of British Studies*, 32 (1993).
(41) CO 885/21, no 265 (p.2).
(42) 一九〇〇年の時点で世界の海底ケーブル総延長の約七二パーセントがイギリスの会社による所有であり、一九〇二年にはイギリス帝国植民地の全地域がケーブル網で結ばれた。D・R・ヘッドリク、原田勝正・多田博一・老川慶喜訳『帝国の手先』日本経済評論社、一九八九年、一九五―一九六頁。
(43) CO 885/21, no 265 (pp.1-2).
(44) CO 885/8, no 150 (p.1).
(45) たとえば、白人の子どもがいない、あるいは、教育水準が当該教材を用いるほどに達していない、という理由で事業への参加を断ってきたローデシアなどについて、マッキンダーは「当然のことだ」として意に介していなかった。CO 885/17, no 188 (correspondence nos. 23, 32).
(46) 一九一一年の時点でそれらに加えて、カナダ版と南アフリカ版の作成が遅れているとある。CO 885/21, no 265 (p.3).
(47) Ibid., no 265 (p.5).

(48) 販売先と数量の一覧は、ibid., no 265 (pp.13-14).

(49) CO 885/17, no 188 (correspondence nos. 140, 170). この書簡で引用された「学校監察官報告」では詳細にスライド授業の状況が記されている。Hong Kong Education Department, *Report of the Inspector of Schools, for the Year 1906*, 1907, pp.510-511, pp.559-563.

(50) インドの表象についてはライアンが博士論文のなかで詳細に分析している。Ryan, 'Photography, Geography and Empire', pp.247-258.

(51) CO 885/9, no 174. なお、( ) 内の数字はスライド枚数である。

(52) Ibid., no 174 (p.3).

(53) Ibid., no 174 (p.4).

(54) Ibid., no 174 (pp.7-8).

(55) 第三～六講のスライド計二〇四枚（うち地図が三枚）に限ってみると、建造物・人工物をモチーフにしたと思われる図版は七九枚、自然景観をモチーフにしたと思われるスライドは七〇枚、行事や人間の動作・作業を描いたと思われるスライドは五二枚あった。

(56) Ibid., no 174 (30 Mar. 1905: correspondence to the committee on visual instruction).

(57) Ibid., no 174 (pp.5-6).

(58) Ibid., no 174 (pp.6-7).

(59) Heathorn, op.cit. とくに本国の地理については、ibid., p.400。

(60) Howkins, A., 'The Discovery of Rural England', in Colls, R. and Dodd, P. (eds.), *Englishness: Politics and Culture, 1880-1920*, Beckenham, 1986.

(61) CO 885/17, no 188 (correspondence nos. 26, 32).

(62) 本国イギリスにおいて、海外帝国を「他者」と措定することによって、その内部の差異を越えて「われわれ」という意識が共有されたという見方については、たとえば、Colley, L., 'Britishness and Otherness: an argu-

ment', *Journal of British Studies,* 31 (1992) を参照のこと。

(63) この議論はブリテン島内の各ネーションの枠を越えたイギリスというネーション British nation の形成と展開にかんするものである。議論の全体像を概観するのに適したものとして、Grant, A. and Stringer, K. (eds.), *Uniting the Kingdom?: the Making of British History,* London, 1995。ブリティッシュ・アイデンティティと帝国意識との関係について示唆されることは当然多いものの、前世紀転換期にかんする限りまだ検討すべき点は多く残されている。

(64) Hooson, (ed.), *op.cit.,* p.4.

(65) MacKenzie, *op.cit.,* chap. 4-6; id., *Imperialism and Popular Culture,* Manchester, 1986; Greenhalgh, P., *Ephemeral Vistas: the Expositions Universelles, Great Exhibitions and World's Fairs, 1851-1939,* Manchester, 1988; Constantine, S., *Buy and Build: the Advertising Posters of the Empire Marketing Board,* London, 1986.

※この研究の一部は、一九九六年度松下国際財団研究助成を受けて行われたものである。

（大学院後期課程学生）